

実地医家における PK-PD 認識度および抗菌薬処方実態調査

¹慶應義塾大学 薬学部 実務薬学講座、²練馬区医師会、³東京慈恵会医科大学 感染制御部

○寺島 朝子¹、前澤 佳代子¹、秋田 博伸²、堀 誠治³、木津 純子¹

【目的】近年、抗菌薬を効果的かつ安全に使用するために、PK-PD パラメータに基づいた投与設計が重要とされている。しかし、プライマリケアを担う実地医家における PK-PD 理論の認識度や抗菌薬処方における考慮の実態は明らかではない。今回、実地医家を対象に、PK-PD に関する認識とレボフロキサシン (LVFX) 錠を例とした処方実態について調査した。

【方法】平成 23 年 11 月、練馬区医師会に所属する医師 456 名に無記名選択式アンケートを郵送した。質問項目は診療科、年齢、PK-PD の認識、抗菌薬処方時における PK-PD の考慮、先発品・後発品の処方状況、LVFX 錠の最もよく用いる 1 日用法用量等とした。

【結果および考察】211 名から回答を得、内科 40%、整形外科 12%、眼科 10%、次いで小児科 9%、耳鼻科 9%等であった。年齢は 40 代 22%、50 代 38%、60 代 19%、70 代 11%等であった。PK-PD 理論は“知っている”59% (よく 8%、ある程度 25%、少し 26%)、 “知らない” 40%であり、処方時に“考慮している” 53% (十分 8%、ある程度 26%、少し 19%)、 “ほとんど考慮しない” 42%であった。“知っている” 医師の 88%は処方時に考慮していた。小児科医は“知っている” 89%、“考慮している” 72%であり、内科医は各々70%、63%、耳鼻科医 61%、67%と比率が高かった。いずれも年齢による差は認められなかった。LVFX 錠の処方率は 47%が 1 日 500mg×1 と回答し、250mg×2 が 14%、100mg×3 が 12%であった。考慮の程度により 500mg×1 と回答した比率が高かった。また、先発品のみ処方 (33%) の 47%が 500mg×1 と処方していたが、後発品のみ処方 (3%) も 17%が処方していた。以上より、今後も PK-PD に基づいた処方の浸透を推進していくことが望まれる。

(会員外研究協力者；木村一幾、大橋祐里)

昭和大学歯科病院口腔外科における抗菌薬の使用状況

¹昭和大学 歯学部 顎口腔疾患制御外科学講座、²昭和大学 歯科病院 薬局

○鎌谷 宇明¹、池田 幸²

[緒言]抗菌薬耐性菌の出現は年々増加傾向で、抗菌薬の使用動向と密接に関わっている。使用動向や分離菌の耐性率を常に把握しながら抗菌薬を適性に使用するため、昭和大学歯科病院では平成 22 年度に MRSA 治療薬、カルバペネム系および第四世代セフェム系の抗菌薬に対し使用届け出制度を導入し、注射用抗菌薬の一部について先発品から後発品に切り替えた。そこで抗菌薬の使用動向と購入金額、耐性菌の発現状況について検討したので報告する。[対象・方法]平成 21 年度から平成 23 年度の間、昭和大学歯科病院口腔外科で入院加療を要した患者に対し投与した抗菌薬を対象とした。抗菌薬の使用量は antimicrobial use density (AUD) を用いて年度毎に集計した。AUD 値の算定に用いた抗菌薬規定 1 日投与量(defined daily dose:DDD)は、米国 CDC(Centers for Disease Control and Prevention)で規定されている値を用いた。[結果]1.ペニシリン系および第一世代セフェム系の抗菌薬の AUD 値は上昇し、それ以外の抗菌薬の AUD 値は低下した。2.薬剤購入費は半分以下となった。3.耐性菌の発現は認められなかった。[考察]抗菌薬の使用と耐性菌に関するサーベイランスは法制化され、その実施は医療機関の義務となっている。昭和大学歯科病院では ICT の活動により、抗菌薬を適正に使用することができてきた。後発医薬品の切り替えにより、病院経営にも貢献することができた。今後はこれらの活動に加えて、抗菌薬の使用に関する教育・啓蒙活動の充実にあたっていくように努めていきたい。